

伝統工芸の技、山形御輿に結集 職人の魂、東北六魂祭で燃える

東日本震災の被災者鎮魂と東北の復興を祈って5月、山形市で東北六魂祭が行われた。市制始まって以来の26万人を超す空前の人出で街は賑わった。メインのパレードでは山形花笠、青森ねぶた、秋田竿灯、盛岡さんさ、仙台七夕・すずめ踊り、福島大わらじが観衆を湧かせたが、パレードの先導を務めて祭りを大いに盛り上げたのが、山形仏壇の職人たちが精魂込めて制作した「山形伝統工芸御輿（みこし）」であった。

「山形仏壇を後世に伝えたい、という思いで、先輩方から受け継いだ技術、技法を最大限に駆使した。市民の方々の笑顔、拍手、掛け声に私たちも感動した」。山形県仏壇商工業協同組合専務理事で、御輿製作のまとめ役を担った森谷大仏堂（山形市十日町）の森谷寛代表は職人たちの

気持ちを代弁する。

宗教色を廃した御輿は高さ約2.10m、奥行きと幅は約1.44m、重さは300kg。台輪寸法75cm。木地はケヤキ、ヒノキ、セン、マツ材を使用。彫刻は四方彫り付き。金具は純金メッキで約1800枚。塗装は漆で飾り紐は浅葱（あさぎ）色。スギ芯付き材を塗装仕上げした担ぎ棒で御輿上部の駒札には、「山形市」の文字を、屋根の四方面の紋には山形市の市章を入れた。組合の伝統工芸士を含む約20人の職人が仏壇造りと同様に、「木地」「宮殿（くうでん）」「彫刻」「金具」「塗り」「蒔絵」「箔（はく）押し・仕組み」と分業して作業を進めた。

山形市は山形鑄物の千年和鐘を購入しており今回は、東北六魂祭山形開催、山形市制125周年記念事業の一環として御輿を発注した。組合

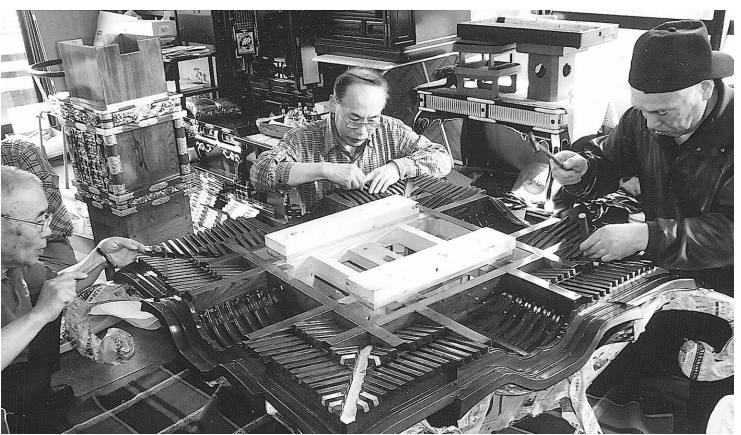
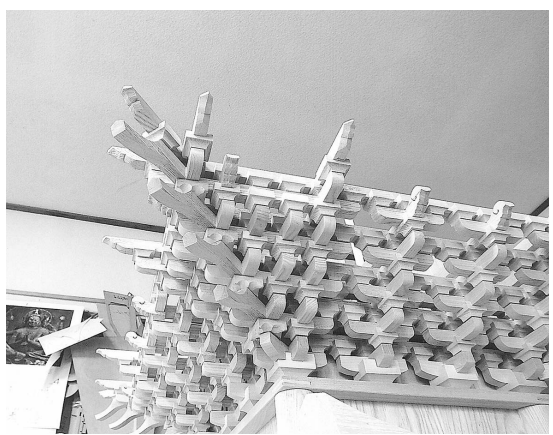
においても伝統技術を形として後世に遺すため御輿を造るための材料を集めていた。山形市からの発注は千載一遇の機会であった。

3百年前、星野家が始める
山形仏壇の歴史は残存する記録・文献によれば、江戸中期の享保年間（1695-1804）にさかのぼる。

およそ300年前ということになるが、大曾根村生まれの星野吉兵衛が江戸浅草の工匠に師事し木彫を学び、帰郷して欄間（らんま）と彫刻を生業（なりわい）としたのが始まり。2代目吉兵衛のころになると、各々の家に「持仏堂」（仏壇）を祀る風習が興り、2代目は古漆塗師、蒔絵師、金具職人を総合して本格的に仏壇の組立・制作・販売を創始した。元来、山形は最上川舟運、日本海航路を利用して京阪地方との商取



職人の総力を結集し製作された山形御輿。写真上の3葉は主な製作過程



山形仏壇の伝統を受け継ぎ、日々精進する4代目鈴木吉男さん

山形仏壇(山形県仏壇商工業協同組合)

「今回の御輿製作は後に続く職人たちの励みともなる。実際に作業に携わることによって得る感触があるし、総力を挙げて一つことに取り組みことの楽しさを知る機会になったのではないかと森谷代表は話す。

日々の仕事で後継者育成

その後継者の1人鈴木吉男さん（鈴木吉助仏壇仏具店、山形市幸町）は、高校卒業しIT関連会社に営業マンとして10年間務めた後、家業を継いだ。金箔を張り付ける「箔押し・仕組み」と呼ばれる作業に神経を集中する。小さいころから見ようみまねで金を張っていたから、仕事にはすんなりと入れた。

作業場を訪れた時には、ちょうど木地の宮殿部分に金箔を張っていた。薄い金箔を油紙からすくい張り付ける。刷毛でさつとなでる。輝くばかりの仕上がりとなる。

「若手職人の技術を高め合うため、内刃物、木工といった異業種の仲間とともに、紅の蔵などで定期的に企画・実演会を行っている。山形仏壇が伝統的工芸品指定を受けた誇りを大事に、日々の仕事でそれぞれの分野の技術を磨いて行く」と話す。

持てる技術の粋を集めて制作された御輿は、山形まなび館で、子どもたち、市民に常設公開されている。

「山形県仏壇商工業協同組合」（組合員数42人、伝統工芸士11人、山形市松見町）は、明治44年11月にその前身である「仏像・神輿・仏壇組合」として組織され、昭和25年2月現在の名称となる。組合員の製作する山形仏壇は、第19回全国伝統的工芸品仏壇仏具展において経済産業省製造産業局長賞を受賞するなどその技術・技法は全国的にも一目置かれている。